新品種候補（2004年１月作成）
作物＞夏畑作物＞１２＞１－２－０８４－１
－－－

２．あずき「十育146号」の特記すべき特徴

「十育146号」は、「ホッカイシロショウズ」よりも餡色が白く明るい色調で、加工適性が優る。また成熟期が「ホッカイシロショウズ」並みからやや早く、落葉病、茎疫病、萎凋病抵抗性を持つ。

３．北海道で優良品種に採用しようとする理由

白小豆は、高級和菓子の原料として珍重されており、岡山県東部から兵庫県西部にまたがる備中地方で古くから特産的に生産され、「備中白小豆」の名で最高級品として取引されるが、その栽培面積は約70ha(平成14年)である。他に、広島県、島根県隠岐、京都府で各数ha栽培され、備中産と合わせて80～90トンが流通している。また、関東の大手メーカーでは、茨城県・群馬県で100ha弱、120トン程度を契約栽培している。その他の地域も含めても、府県では200～300ha程度の栽培面積と推定される。(以上、ホクレン調べ)。

本州の白小豆栽培地域では､農業者の高齢化が進んで安定供給ができず、白小豆価格の変動が非常に大きい。このため、加工業者から、北海道で良質の白小豆を安定供給することが要望されている。

北海道では、「ホッカイシロショウズ」(昭和54年育成)が唯一の白小豆の優良品種であるが、本州産と餡色や風味が異なり、品質面で加工業者に敬遠された。また、耐病性・耐冷性等の点で栽培が難しいこともあり、あまり普及しなかった。最近では、平成２年に61haで栽培されたが、その後全く栽培が無くなるなど、栽培面積の増減が大きい。最近、本州産白小豆の不作が続いたこともあり、平成14年には契約栽培を中心に24haになった。

今回育成した「十育146号」は、兵庫県の白小豆在来種を遺伝的背景に持ち、「ホッカイシロショウズ」よりも餡色が白く明るい色調で、本州産白小豆に近い。製品についても「ホッカイシロショウズ」より高い評価をする加工業者が多い。また、本系統は耐冷性は「ホッカイシロショウズ」と同じ"弱"であるが、成熟期がやや早く、土壌病害抵抗性も持っており、農家にとっても栽培しやすい。北海道で白小豆復活の兆しがあるこの時期に、加工適性が優れる「十育146号」を「ホッカイシロショウズ」に置き換え、100ha程度の白小豆栽培面積を確保することで、良質の白小豆を本州産より低価格で安定的に供給することが可能になる。これにより、新たなユーザーを獲得して安定した需要を確保できると考えられる。

４．普及見込地帯

北海道の道東の早生種栽培地帯(Ⅰ-１)を除く小豆栽培地帯（右図網掛け部）

５．栽培上の注意

１）白小豆はピシウム苗立枯病に対して種皮色が赤色の品種より弱いので、チウラム水和剤F(40%)の塗抹処理による種子消毒を必ず行い､播種量を多めとする。

２）成熟期前後の降雨で腐敗粒が多発する場合があるので、刈り遅れを避け適期収穫に努める。特に高温年は、雨害が多発しやすいので注意する。

３）落葉病、茎疫病、萎凋病抵抗性は"強"であるが、栽培に当たっては適正な輪作体系を守る。

４）茎疫病発生圃場では、優占するレースにより多発する場合がある。

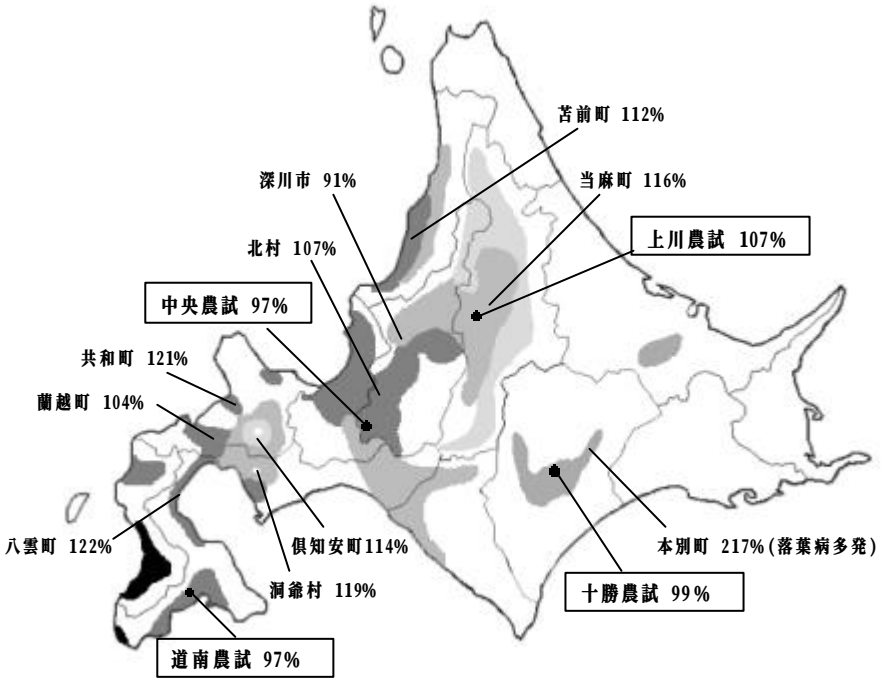

図　「十育146号」の普及見込み地帯における「ホッカイシロショウズ」との子実重対比

注）１．奨励品種決定調査等の成績による。

２．地図中の網掛けは下記の「道産豆類地帯別栽培指針」(平成６年北海道農政部)による地帯区分

:Ⅰ-2(道央・道北早生種地帯)　:Ⅱ-1､Ⅱ-2(早・中生種地帯)

:Ⅲ(中生種地帯)　:Ⅳ(中・晩生種地帯)